



研修便り



高知市教育研究所教職員研修班
平成28年9月27日発行 No.88

授業改善のための実践研修（外国語科）

平成28年6月27日（月）実施

目的

平成31年度から始まる中学校英語4技能を測る全国的な学力調査の実施に向けて、全中・義務教育学校がスムーズに対応できるよう研修を実施し、4技能を測る調査問題の作成を通して新しい学習指導要領に対応した授業実践をめざし、英語科教員の授業力の向上を図る。

研修Ⅰ【講義】「全国学力調査を見据えて、今、外国語教育に求められていること」

—適切な指導をすれば、学力はぐんぐん伸びる—

関西外国語大学 中嶋 洋一 教授



大切なのは、教師の「教え方」ではなく、生徒の「学び方」に関心をシフトすることです。

授業がうまくいかない三つの理由

- (1) 「自己流」にこだわっている（他により方法があるのに、知ろうとしない）
- (2) 単元のゴールが「不明瞭」（最後は「活用」させるのがルール）
- (3) 授業の「着地点」を子どもに教えていない（詰め込むのではなく、7割の内容をめざし、ゆとりと余韻を作る。授業の最後に設定する言語活動を通して、理解した状態を確かめてから、終了する）

『どう対応すればよいか？』



(1) 「付けたい力」を教科部会で共通理解する

- ① 教科書を終わらせることがゴールではない。
- ② どの子にも学力（到達目標の達成）を保証する。
- ③ 単発の「ゲーム」や「ごっこ遊び」で終わらせない。

(2) 学習を始める前にゴールを示す

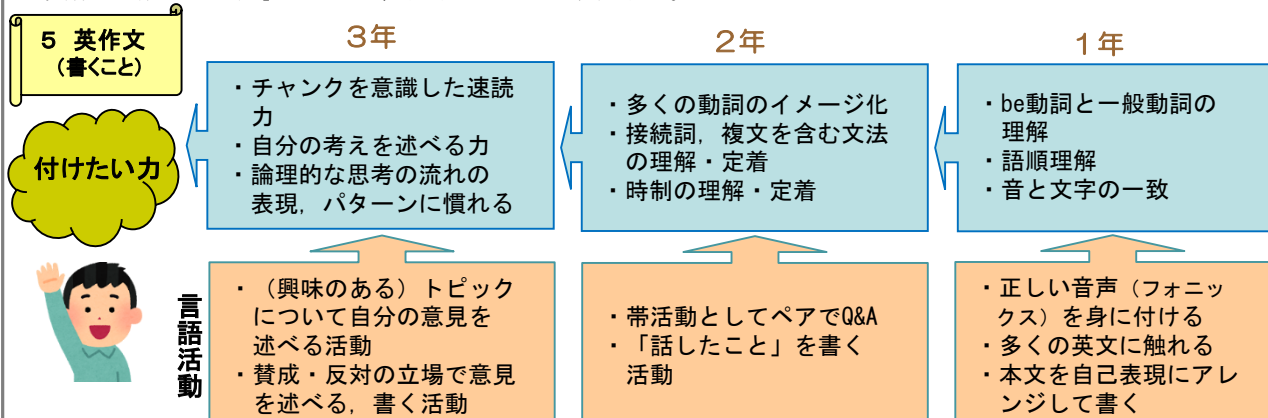
- ① 学期の始めに定期テストの形式を伝えておく。
- ② 授業の最初に「今日のゴール」を板書しておく。

(3) language usage（使い方の説明）ではなく、language use（実際に使わせる）に切り替える

- ① 日本語と英語を徹底的に比較する。
- ② SV(→)OとSV(=)Cを意識させる。

研修Ⅱ【演習】「過去5年間分の公立高校学力検査問題の分析」

公立高校学力検査問題に対応できる力を付けるために、各学年のゴールに身に付けさせたい力と単元ゴールで付けたい力を見取るための言語活動を、授業で行う具体的な指導と合わせて学年ごとに話し合った。ここでは、大問5「英作文（書くこと）」について、協議した内容を紹介する。



- 「身近なトピックについて自分の考えを書く」「インタビューした内容をレポートする」「チャンクで意味のまとまりを捉える」などの活動を3年間を通して行う。

【受講者の感想】

- ・ 入試を分析することで、授業での言語活動をどうテストにつなげていくか、50分の構成の仕方を見直すよい機会となった。
- ・ 付けたい力を入試から逆に考えていくことで、やるべき指導が見えてきたことがよかった。まず、英語科教員で共有し、出来る取組について考えていきたい。

あったか学級づくりアドバイザー派遣事業

高知市教育研究所

高知市教育研究所では、平成26年度から『あったか学級づくりアドバイザー派遣事業』を行っています。

本事業は、すべての子どもに居場所のある学級づくりをめざして、学級経営に困難を感じている要因を分析し、教育的な視点からの具体的な対応について専門家からアドバイスをいただくものです。

さまざまな悩みや課題を抱えながらも、日々子どもたちと真剣に向き合い、子どもたちの健やかな成長を願って全力で取り組んでいる学級担任や学校を支援するとともに、ともに学び合う学年・学校体制づくりを考えることができる機会にいただければと思います。

2学期以降も是非、本事業をご活用いただければと思います。



すべての子どもに居場所のある 学級・学校づくりを



○ 担任の指示が通らないような状況になっている学級についての具体的な助言
例) 行動観察, 指示や説明の行い方等

○ 特別支援教育の視点を大事にした学級経営や授業展開についての助言
例) 視覚支援の工夫, 教室環境の整備等

○ Q-Uやあったかアンケートを活用した学級の見立てと学級経営への助言
例) 学級集団づくりの工夫等

○ 人間関係づくりプログラムの実施についての助言
例) 構成的グループエンカウンター等の紹介

○ 教員間のピアサポートや授業づくりを学び合う体制づくりへの助言
例) 担任がやってよかったと思える授業公開等

アドバイザー (高知大学)

- 鹿嶋真弓 先生 ○ 金山元春 先生
- 是永かな子先生 ○ 鈴木恵太 先生
- 松本秀彦 先生

【助言例】

- ・ 学級風土を好ましい方向に変化させるために
①クリアできそうな目標を設定②チャレンジ③肯定的評価の3ステップで児童が「できた」と実感でき、前進する意欲をもてるようにする。
- ・ 好ましい行動を認める機会を増やし、「自分も」という思いを引き出していく。
- ・ 児童の好ましくない行動には、感情を挟まず淡々と、すべきことを伝える。できたら肯定的評価をすかさず返す。
- ・ 「～しなさい」でなく「～できたらいいと思うよ」「～が嬉しいな」「～で最高」などI (アイ) メッセージでの促し、仕切りなおし、評価という今の流れにプラスして「OK! ありがとう」などの感謝の言葉も入れる。
- ・ 後ろの席が気になってしまう子どもの椅子を前に向け、二者間に体を入れて支援する「身体的ガイド」が有効となる。支援者が立ち位置を変えて刺激しそうな物や子どもの間に入るなどの環境をつくるのが大切である。

アドバイザーの派遣は、1事例につき3回程度です。
教育研究所の指導主事がアドバイザーとともに同行します。



これまでの派遣実績

平成26年度 小: 9校 中: 2校
平成27年度 小: 6校 中: 2校



派遣を希望する学校は、教育研究所・教育相談班 (832-4498) にご連絡ください。

所報「研究」No. 666では、事例をふまえてアドバイザーからの助言を具体的に紹介しています。ルールとリレーションの確立されたあたたかい学級づくりに向け、ぜひご一読ください。

